【岩本論文へのコメント】

発達障害傾向を有する人の自己理解促進のために

山　科　　満

発達障害傾向にある人の支援において「自己理解」の促進が核心的なポイントであるとの見解に基づき、メンタライジングの重要性を指摘した上で、自己理解促進に資する介入プログラム作成を目指して文献研究から始める、という趣旨の論文である。

検討した文献は幅広く45本に及び、介入方法を確立していくための仮説生成への手がかりを掴む役割をよく果たしていると言える。今後の著者の研究が発展されることを強く期待させる内容となっている。

問題設定に至る論旨は明瞭である。まずは発達障害傾向を有する人の就労場面における2次障害を防止するためには、自己理解の促進が鍵となることを、先行研究に基づいて指摘している。次に、自己とは何かをダマシオから説き始め、発達障害傾向の人の自己の発達プロセスが定型発達と異なり、「人の内的な情動や心に関する記憶の積み重ねが圧倒的に少ないまま」自己概念が形成されていることを押さえた。それを踏まえてメンタライジングすなわち「自己と他者の精神状態に注意を向けること」の経験の積み重ねが必要であることを強調している。

ここで、他の論文には見られない独特の記述がある。それは著者が当事者研究を続けてきた成果に他ならない点である。すなわち「(略) メンタライジングするという経験を経て、まさに自己と他者の価値観の擦り合わせをしていたある瞬間にリアルな自己感が立ち上がった」という著者自身の経験を述べた箇所である。「自己感が立ち上がり世界の見え方がクリアになる感覚」というのは、著者ならではの、これ以上無い的確な記述であると感じられた。コメントを書いている筆者（精神科医・臨床心理士）が発達障害傾向を有する人の外来診療で稀に出会い、精神療法で目指しているものはこれであったのだと、はたと納得させられた。

このような著者自身の経験に根ざし、著者は、ASDのある人に必要な自己理解を促進するために、メンタライジングのスキルを効率よく身につけていただけるような介入方法を探ることを問題設定しているのである。

文献研究の目的が絞り込まれているため、結果は簡潔明瞭である。メンタライジングに必要な脳機能としてワーキングメモリと注意の切り替え機能を挙げ、現状での介入方法を紹介している。その上で、考察のポイントをメンタライジングに必要な要素とそれへのトレーニング方法の可能性に絞って論述している。

著者の研究は、まだ端緒に着いたばかりである。しかし、この研究が、発達障害に関する数多の臨床研究を凌ぐ本質的に重要なものになることを、筆者は確信している。当事者ならではの視点と、客観的な研究者としての目配りが合体したとき、これまでにない説得力を持った研究成果が得られるに違いない。岩本氏の次なる論文が待ち遠しい。

Mitsuru Yamashina：中央大学文学部人文社会学科心理学専攻